

滿和對譯 滿洲實錄

東洋史研究會叢刊第一

今西春秋譯稿

本書は、今回我が東洋史研究會の叢刊第一として推されたものである。

滿洲實錄は清朝太祖奴兒哈赤の事蹟を實錄したもので漢文を中央に滿文(上)蒙文(下)の三體を以て併記された八卷八冊より成る寫本にして中に八十餘面の繪圖を挿入してゐるのが著しい特色である。内藤湖南博士は早く日露戰爭當時之を奉天故宮の崇謨閣内に發見し、ついで藝文誌上(第三年清朝開國期の史料)に紹介せられ、「繪入りの滿洲實錄は、太祖一代の事跡に就ては、我が傳抄清三朝實錄と殆ど同様の價值あること、殊に滿洲實錄はその滿蒙兩文を備へて滿洲蒙古の原語の意義を正確に傳へる點に於て長所がある」としてその資料としての價值を高く評價されて以來一般學界の注目を引く所となつたが、如何せんその書の性質上、常人の披見は半ば不可能視されてゐた。偶々民國十九年遼寧(奉天)運志館はこの書より漢文と繪圖とを抽出し、同大に影印刊行したが、滿洲實錄は、前述の如く滿・漢・蒙三體の並記によつて成るとは云へ、特にその基底を爲すものは滿文である以上、これが尤も重要視されなければならないにも拘らず、故らに滿文蒙文を削除した爲、折角の企ても徒らに吾等をして、未見の滿・蒙文に對する憧憬の念を高めしめると謂ふ結果を齎らすに過ぎなかつた。然るに

かねて滿洲國文化の宣揚を使命とする日滿文化協會は、かゝる學界の期望に副ふべく改めて奉天故宮崇謨閣藏滿洲實錄の影印複製本の出刊に着手し、昨年(昭和十年)八月遂にその完成をみた。今西學士は實にこの日滿文化協會本に據つてその滿文を翻譯したものである。即ち、滿文をメレンドルフの法に依りローマナイズ

して之に逐語的邦譯を施した美濃版洋紙約四百頁を數へる雄冊で猶卷頭に解説、卷尾に人名地名索引表が添附されてあるが、前者よりは清初史研究に對する氏の深遠な造詣の片鱗が窺はれ、又後者よりはこの種滿・蒙文資料の繙讀に際し常に感ぜられる困難を排除せんとする周到なる注意の存することが知られてその學的良好性の奥床しさがしのばれる。更に、本稿は氏が纔か歲餘の短時日の間に能く難解の滿文を克服讀譯し、且つ獨力謄寫出刊された書であることに思ひ至る時、その努力の前に吾人は無條件的の尊敬を拂はなければならない。

今、譯稿を繙いて新に痛感されることは、滿文が古拙素朴ではあるが生々とした生命を以て彼等女真部族の社會生活を如實に描き出してゐる様は到底漢文の比でなく、それ丈に今猶、未開拓の分野として放置されてゐる女真族社會の考究に無限の根本的資料を提供してゐると謂ふことである。殊に現存滿文老檔が太祖己未の年以前を缺如してゐるに於ては、この方面に對する滿洲實錄滿文の資料的價值は最高に評價されても決して過大には失しないであらう。——假令、太祖武皇帝實錄滿文に多少の期待は變じうとしても。

かくて、先きに那珂通世博士の邦譯元朝秘史即ち成吉思汗實錄を有し、こゝに又今西學士の和譯滿洲實錄を手にしえた吾等は、兩書の外に、突厥碑文・Altan tobči・蒙古源流・滿洲老檔等直接彼等の手に成る始源的資料を手廻りに、今日殆んど暗闇に等しい北方民族の部族社會組織の究明に邁進すべきである。

序で乍ら、本譯稿を通讀して二三眼についた點を書き留めて譯者への敬意としよう。

譯語の不統一

例へば、cooha i myalma を「兵の人々」「兵の者」「軍の人々」とし、taara を寶石・眞珠・珠玉 da nafa を始祖・始祖、heeen hocon を城廓・城邑(卷七 p. 38)としてゐる如き、又 esaan に村・寨(或は塞)柵の三語を混用し、aiman, golo, uksun, mukun を齊しく族と譯し、hala は殆んど姓としてあるが時に族(卷六 p. 25)としているなどのことは部族の組織を考察せんとするものに往々概念の混淆を惹き起さしめる。

適はしくない譯語

例へば、sahun halai「親家の同じ姓の」(卷一 p. 37)これは同姓婚を爲してゐる如き考に陥らしめる恐れがある。harangga「同族」(卷二 p. 38)これも清文彙書・清文鑑の如く、屬下・轄下・部下の意に譯する方が無難であらう。suncin「寨」(卷一 p. 41)これは山城或は山鎮の音譯ではあるまいか。

emu toiran「ふ記」(卷二 p. 14)及び yafaha i coohai「歩の兵」(卷二 p. 23)も雅でない。

deraku「顔無き」(卷二 p. 15)、「顔面なし」(卷三 p. 60)は、厚顔又は面目なしとする方がよい。

adka sindaci「天おけば云々」(卷四 p. 15) sindambi に補授・授官の義があるが故に「天授ければ」などとする方がより解りよい。

aihe「素珠」(卷七 p. 2)は數珠。

「城は大乍ら……初めの地に……」(卷七 p. 20)、城大ならんも……初めの地に……の意であらう。

hala hala i gurun「色々の國」(卷七 p. 2)諸姓の國では如何。

以下は各所に出てくる語であるが、

boo「家」この字は恐らく今日蒙古人の常套語なる Bao と同じく「包」の音譯であらう。

doro 政・法・禮・道の義で、突厥碑文にも屢々用ひられてゐる。

merges「賢人」(卷一 p. 註)、本來この語は善射人・善獵人の義であり(蒙古語も同様)狩獵に於て多く獲物をうる人を以て尊敬視したことが窺はれて興味深い。

adkai leesi de「天の恩眷に」(卷三 p. 33)、leesi もトルコ語、蒙古語の Leisik, leesi「恩惠・幸福」等と同系統のものであらう。

その他、全卷に互るものとしては、助詞 de 及び ge が屢々混同して譯されてゐるのが目立つ。又原文には助詞はなくとも國語として必要な所には括弧でも入れてデニヲハを附して欲しい。

動詞の未來形尾 re と希望形尾 ri を使ひ分けるに苦心の跡は充分窺知しうるが、頻出する前者に對しては機に應じて今少し適

當な語法を工夫すべき餘地が見出される。

猶、二三疑問の儘にしてある所をみたが、これらの個所は蒙文と比較對照することが必要である。

以上、秩序なく瑣細な點までも採り擧げたが、要するに纏て出づべき決定版をより完からしめんとの微意より出でたものに外ならないが故に、この點、譯者も必ずや諒とせられるであらう。

最後に、吾等は敬虔の念を以て譯者の決定版への精進を期待すると共に、それが一日も早く出刊されて、今後滿洲史研究の如何なる論文に在つても、常に氏の和譯滿洲實錄が引用されることを望んで止まない。(秋貞實造)

史學科研究年報 第三輯

臺北帝國大學文政學部刊

本書所收の論文は三佛齊考(桑田六郎)・日明交通史上の所謂永樂宣德兩要約の疑問と其真相(小葉田淳)・南洋日本町の盛衰―暹羅日本町の盛衰―(若生成一)の三である。此の中便宜上桑田氏の三佛齊考に就き聊か記し以つて本書の紹介に代へることゝし度い。先づ其内容を讀むに緒言・赤土・室利佛逝・三佛齊の四章に分かつてゐる。緒言に於ては唐時代には室利佛逝、宋代には三佛齊の名を以つて支那に入貢して居るスマトラの王國に關する從來の諸研究の結果に關して記され、三期の發展があつたとし、其迹を辿つて問題の進展を明示すると共に、現在に於ける問題の所在

を指摘して居る。第二節の「赤土」は隋書の南蠻傳に記載されて居る赤土國は南洋の何處にあるかに就いて所見を披瀝したもので、

(一)隋使が馬來半島東海岸に沿つて南下せること、(二)唐代には赤土國の名なく、隋書には室利佛逝なく、而も國情の記述が似て居ること、(三)日又兩國の四至が一致して居る等の諸點から隋の赤土國は唐の室利佛逝であると斷定された。第三節「室利佛逝」の條に於ては唐僧義淨に依つて初めて正確に支那に紹介されるに至つた室利佛逝はスマトラの Palambang なることを明證し、更に此國の唐への入貢に就いて記して居る。唐代の記錄に依ると室利佛逝が始めて入貢したのは唐高宗の咸亨年間で、其以後玄宗の天寶元年の入貢を最後とし、昭宗の天祐元年に至る迄、全く入貢が杜絶した。其理由は如何に解すべきであらうか。これは九世紀の前半に於て室利佛逝の國力が不振に立至つた結果と思ふ。然るに半而隣國の詞陵・瓜哇―が天寶以前に入貢すること少なきに反して、

大曆、元和年間頻繁に入貢して居る。これ即ち兩國の盛衰を示すものではあるまいか。尙ほ進めて言へば、大曆、元和即ち八世紀の後半から九世紀初めに互る詞陵の活動は則ちジャバの *Salendra* 家の活動を意味して居る。ところが此の瓜哇の *Salendra* 家は室利佛逝王家と關係を生じ、後者も亦 *Salendra* 家となり、かくて此王家に依つて室利佛逝の國勢不振が挽回された。天祐元年の佛齊國入貢はかゝる事情に基づくものと解釋される。第四節「三佛齊」の條に於ては唐代室利佛齊と稱した國が宋代には三佛齊として盛んに入貢するのであるが何故に室利佛齊が三佛齊の文字に置換えら